T3T

冬期講習

解答

Ｚ会東大進学教室

医系小論文

1章

【添削課題】

出典…金沢大学・教育学部・02年

解答

設問1

筆者は、人間の欲求を野放図に肥大化させ、環境破壊を押し進めてきたこれまでの科学技術を転換させるために、行政や科学研究において、組織や制度の改革が必要だと述べている。そのポイントは、技術開発の目標を現代の人々の快適性・利便性におくのではなく、将来の世代の安全性におくというあり方へ、制度的に変更することである。行政の政策と、科学者の総合的で横断的な研究の積み重ねによって、それを実現しなければならない。

設問2

【文章例1】

科学技術の方向を研究者の自由意志にまかせてよい時代ではなくなった、という筆者の示唆はたいへん重要だ。では、どのような「社会制度」を構想していけば、これからの社会に合った科学技術を実現できるだろうか。

理想的なあり方としては、科学技術を方向づける政策を明確に立てることが必要だ。そのために行政・研究者・市民の三者からなる会議を設け、合意を作り上げることが望ましい。研究者は、それぞれ勝手に研究を進めるのではなく、積極的に研究成果を情報公開し、市民の側へ出ていくべきだ。また、行政は市民の意見をくみ取りつつ、科学技術を制御する有効な政策を考えるべきである。そして市民は、問題があれば少しでも科学的に理解した上で科学技術の現状を批判し、環境を守り人間の生活を守る方向へと科学技術を方向づけねばならない。

もちろん、一般の市民が、今日の高度化した科学技術を十分に理解することは不可能だ、という批判が出るだろう。しかし大切なのは、科学技術の成果をただ受動的に利用して喜んでいたり、よくわからないまま批判したりするのではなく、積極的に理解しようと努める姿勢ではないか。それによって、市民が科学技術と深く結びついた自分の生活を振り返ることにもなり、「肥大化」した欲求への反省にもつながる。産業の発展と生活の便利さのみを目標にした科学技術は、市民の側の改革によっても転換させられることが求められているのだ。

【文章例2】

科学技術の研究は、新製品を開発して利益を上げたい企業や、研究実績を重ねたい研究者の思惑に、どうしても影響を受けるものだろう。そのこと自体は一概に否定はできない。環境に役立つ研究開発も存在するからだ。必要なことは、現在研究されている科学技術がどのような性格なのか的確に評価し、それにより、資源・エネルギー・環境上の制約に十分対処できる科学技術を選別することである。そして、そこに市民が積極的に関わり、生活感覚にもとづいた意見を述べていくべきだ。

とはいえ、一般の市民は十分な専門的知識を持っていない。そこで、市民の側に立って知識や情報を提供する科学者を大学で育てることが、これからの科学技術のあり方を考える上で不可欠だ。大学が真の社会貢献を目指すなら、そうしたプログラムを用意してよい。特に環境問題では、研究における分野間の壁だけでなく、大学と市民の間の壁も取り払うことが重要だ。市民の活動を科学者が知識面で支え、それによって、環境制約を無視した科学技術にＮＯと言えるようにすべきである。

産業界だけに引っ張られる科学技術や、それに追従する研究者によって密室で進められる科学技術は、これからは排除される必要がある。そのためには、科学技術を市民の目から評価し、批判していくことが大切であり、また、批判的な目を持った科学者がそこに力を与えていくような体制を整えていくことが望まれるのである。

解説

1　出題意図

これからの科学技術のあり方、という論点は、医療・自然科学分野の小論文では基本中の基本である。最近は、こうした大きな論

点よりも、具体的な論点がよく出題されるようになってはいるが、それでも本問のような頻出問題にしっかり取り組んでおく必要がある。なぜなら、こうした論点は、自分のものの見方・考え方の基盤を確認することになるからである。

もっとも、この問題もただ漠然と「科学技術のあり方」を問うのではなく、課題文筆者の意見を的確に読解し、それを踏まえて自分の考えを展開するよう求めている。したがって、どんなに優れた文章を書いても「筆者の意見」との接点が全くなければ「不合格答案」となるから、まずは課題文の主旨をしっかり読み取ろう。

2　設問要求

① 「21世紀の科学と技術のあり方」について述べられた文章を読む。

② 設問1　筆者の意見を二〇〇字以内でまとめる。

③ 設問2　筆者の意見を参考にして、これからの社会における科学や技術のあり方について、自分の考えを六〇〇字以内で述べる。

3　課題文の読解

課題文は大きく二つの部分に分けて整理できる。前半は、科学技術の現状とその背景、そして予測される未来について述べている、第三段落までの部分である。この部分では筆者の現状認識・問題認識が示されており、意見を展開するための前提的な記述となっている。そして第四段落からの後半が、その問題認識を受けて、どのように解決の道を探ればよいかを具体的に「意見」として提示する部分になる。

【前半部の要点】

前半部に述べられている指摘は、筆者自身が「言うも陳腐ながら……」と表現しているように、よく耳にする内容でもある。もろもろの「環境制約」を無視して「人間の欲求の限界を野放図に拡大」する近代の生活が、21世紀に大きな災厄をもたらすことは想像に難くない。ただし、ここで重要なのは漠然とした「生活」の問題ではなく、あくまで「近代科学／技術」の問題点であるか

ら、むしろ第一段落の最後の一文に着目すべきである。つまり、科学技術の依拠する枠組みが、さまざまな環境問題の出現にもかかわらずいまだに「資源の無限性」「環境の処理能力の無限性」という根拠のない前提の上に立っているというのである。したがって、この点をいかに転換させるかが、後半での筆者の大きな関心となるのである。

【後半部の要点】

まず第四段落で、前半の問題を解決するためには単に「スローガン」や「理念」を掲げるだけでは不十分だという筆者の立場が明示される。それらを支える現実的な仕組みが「社会制度」として必要であることが第五段落で述べられ、第六段落以降で、その「社会制度」の輪郭を筆者なりに具体的に描こうとしている。ポイントとされるのは、技術の目標を「現代の世代の利便性」から「将来の世代への安全性」に転換することである。第七段落ではより具体化されて、「安全性」のカギが「『人工物』の管理、自然への還流」にあるという。そのために、政策としてその方向を後押しすること、「領域を横断するような総合的な視点」で環境問題を科学的に解明すること、といった二つの面（行政・科学研究）からの「改革」を提言している。

4　論述へのアプローチ

設問1

設問1は、全体の要約ではなく「筆者の意見」をまとめることが求められている。よって、より重要なのは後半の内容である。後半の要点をしっかり解答に盛りこむことを第一に考え、そこに前半の現状認識を付け加えるつもりでまとめていこう。くれぐれも、文章の頭から順に要点を書き抜いていく、などという不手際をやらないように注意すること。

では、肝心の後半でもどの部分が「意見」として最も重要なのだろうか。先に見た各段落の役割をもとに選択すれば、まず重要なのは第五段落である。そして、それを一段階具体化した記述が、第九段落と言える。また、その「改革」の中身・方向性を示しているのが、第六段落である。以上の内容は必ず解答に盛りこみたい。ここで、具体例をまっ先に書きたくなる人が出てくるかもしれないが、それは文章の主旨を読み取るという点で不適切であり、この設問に限らず注意してほしいところだ。

設問2

設問文での指示から考察のポイントをまず確認しよう。一点目は、やはり「筆者の意見を参考にして」という点である。二点目は、ここで考察する「科学や技術」としてどのようなものを想定するかという点である。

①第一点目……筆者の意見を参考にする

筆者の意見は、ある程度は具体的に示され、かつ包括的な方向性も明確になっているので、仮にこれを否定しようとしてもほとんど無理だろうし、かといって「筆者の意見に全面的に賛成」と述べるだけでは「あなたの考え」としては不適切になる。ということは、「参考にする」という指示の意味とは、あなたなりに筆者の意見を発展・展開させなさい、あるいは、筆者の意見に欠けている点や補うべき点を見出せればそれを書きなさい、といった意味なのだと判断できる。

②第二点目……ここで考察する「科学や技術」としてどのようなものを想定するか

「これからの……科学や技術のあり方」を具体的に描いてもよいが、おそらく「環境調和型」「環境回復型」といった方向に落ち着くことだろう。環境を破壊する科学技術から、環境問題を解明し、環境の回復を実現する科学技術へ、といった方向はよく耳にするものであり、君たちなら誰もが一度は書いたことがありそうな答案になると予想される。しかしそうなると、いわゆる環境問題をテーマとした小論文でよく見られる論に行き着くか、あるいは、みな似たような論述に終わることになりかねない。そこでぜひ考えてほしいのは、筆者が科学技術のあり方そのものを提示しているのではなく、その「改革」の方向を考察することによって、これからの科学技術が目指すべき方向を浮かび上がらせようとしている点である。この筆者の姿勢を参考にした上で、科学技術の性格をいかにして変えるかという視点も含めて「科学技術のあり方」だと考える方がよい。どのように変わるのか、誰がどのように変えていくのか、という要素を答案に盛りこもうと考えるなら、筆者が述べ尽くしていない論点や、筆者が提示していない具体案を君たちなりに導き出すこともできるだろう。

筆者の意見を踏まえる際に忘れてはならないのは、筆者が「理念」や「スローガン」だけでは科学技術の変革は実現しないと考えている点である。これは、環境問題に関わる小論文そのものにとって重要な指摘であり、君たちにしっかり意識してほしい。昔の生活を理想化したり、「環境に優しい」といったスローガンを繰り返したりしても、それは現実を変える効果を持つかどうか疑

問である。実際、そうした「お題目」だけが宣伝されてきたのが私たちの社会であり、だからこそ環境問題も科学技術のあり方も、さほど目立った改革が実現していないのではないか。

もう一つのヒントは、筆者が「産業界」あるいは「企業」という領域について何も語っていない点である。今日の科学技術の問題は、それが利益を目的とする産業活動に直結している点にある。つまり、人間の欲求が野放図に放置されているのは、それによって利益を得られる産業の側から社会のあり方が規定されていることを意味している。この点を、科学技術の変革ときちんと結びつけることができれば、筆者が検討していない課題に取り組むことになり、小論文の出来ばえを高めるポイントとなる。

2章

【添削課題】

出典…東京医科歯科大・医・01年

解答

問1

誰の窓にも平等に吹く清風（真理）を悟る道は、自分と対象と風がひとつにとけあい自我を空じることだ。「風のこころ」とは、これを可能にする、物質的現象や実体のない空即ち虚無や境遇に偏らない心のあり方をいう。

問2

心臓外科医が児童らを対象に行った死に関する授業（テレビ番組）が心に残っている。「死とは何なのか」という彼の問いかけに答えられない子供たちに対し、彼は自分の患者と対面させた後に心臓手術のようすを見せる。一つ間違えば患者のいのちが危うくなる手術に子供たちの目は釘付けだ。

彼が行ったのは子供たちに風を送る試みである。思わず自分の心臓を押さえてしまう子どもの姿が示すように、風を受けて子供たちは患者の生と自身のそれとの繋がりに気付きつつある。心臓手術自体は物理的振る舞いであるが、彼らが受け取ったのは実体のない物質的現象ではない。更に風の一端は、テレビ画面を通して私の中にも吹き込んだ。私の医療への思いが、明確な像を結んだのである。

今私が考えているのは「病診連携」をもっと拡大したところに、即ち、医療関係者や患者のみならず、地域や社会全体を巻き込み展開される医療である。誰もが病に罹り、誰もがやがては老いや死を迎える。高齢化が進むそうした現実を医療者のみで背負うことが出来るだろうか。老いや死に立ち向かい或いはそれを受容していくには、地域や社会に生きる多くの人々との連携が必要なのだ。

そうした医療に貢献し得るための第一歩は、私の窓に吹く清風を感じ取れるような生き方を目指すこと。そして将来は、あの医師の

ように多くの人々に風を送りまた風を受ける医療者となりたいと思う。

解説

1　課題文について

与えられている文章はエッセイである。エッセイとは、書き手が、自身の自由な思考の流れに任せて綴っていく文章であり、どんなふうに流れどこに行き着くかが、（もしかしたら書き手自身にも）わかりにくいという特性を持つ。ただ半面、書き手自身の基本的な観（ものの見方）や感性のありようは明瞭に現れてくることが多い。こうしたエッセイの持つ特徴を踏まえ、それをうまく活用していくことが、エッセイ読解のポイントである。

入試小論文において資料としてエッセイが課される率はあまり高くはないが、医療系は例外である。例えば、東京医科歯科大学では、一見医療とは関係のない課題文が出題されることもある。なぜ、医療系では、エッセイがよく出題されるのか。大学側が求めていることとエッセイの特徴とを合わせて考えれば、その理由は明らかだろう。自由な思考の流れに沿い綴られるゆえに論理の飛躍や省略などが頻出するエッセイを読み解くためには、教科的読解力だけではなく想像力や共感力などが必要となる。こうした力はいうまでもなく、医療者に求められる基本的資質である。すなわち、大学側は、エッセイを通し、他教科では測ることの出来ない君の資質を見ようとしているのだ。こうした点に十分留意し、まずは、与えられた課題文を丁寧に読むことから始めよう。

2　課題文の概要

課題文は、『風のこころ・ひとのかたちと憂き世のかたち』という書物からの抜粋。最終段落から分かるように、「浮き雲に待つこともなき身にしあらば風の心にまかすべきなり」という句から想起したことを自由に綴ったエッセイである。こうした文章に馴染みの少ない者にとっては読みにくいかもしれないが、設問要求を踏まえ、筆者の思考をたどりつつ読み進めていくとよい。

【第一段落…風とそこから想起する幾つかの句と言葉】

1　風が持つ二つの側面とその特性

▽二つの側面

① 物理現象→空気の塊としての移動

② 薫ったり、季節を伝えたり、無常のこころを起こしたり、音を立てたり、死んだふりをしたりする生き物

▽特性→強弱さまざまに、どのような方向にも、どのような場所にも、形を見せずに吹いてくる。

2 1を表す句とその解説

・句→「清風匝地何の極まりかあらん」

・解説（松原泰道師）

→清風（真理）はどこにでもあるから、とくに求める必要はない。

→清風は誰の窓にも平等に吹き込んでいるのだが、それをはばんでいるのは、我見（自我からの認識）の強さ。

3 2と同じ意味の句

・句→「微風幽松を吹き近く聴けば声いよいよ好し」

・意味→微風が五官にとらえられない松に吹いて、かすかな音を立てているが、それに近づいて聞けばその音はますます美しく、自分と松と風が一つにとけあう。

→一つにとけあったところでは自我を空じることができる。

4 3から連想→「真空不空」という禅の言葉

5 松原泰道師による4の言葉の解説

→「かたよらないこころ・こだわらないこころ・とらわれないこころ」という高田好胤師の言葉を援用

→物質的な現象か、あるいは実体のない空に偏ってしまう誤りを説く。

【第二段落…「真空不空」からさらに想起】

「真空不空」に従うと、「色即是空　空即是色」（「般若心経」）＝「色（物質的現象）はすべて実体のない空であり、実体のない空であることが、物質的現象なのである」という意味が、理解されるような錯覚を起こす。

【第三段落…「風」についてさらなる想起】

・蕪村の風を歌い込んだ句のいずれもが、風を音としてとらえている（森本哲郎氏）
・風は温度差（友人の女性編集者）↑女性らしい表現だが感性のことに理屈は不要（筆者のコメント）。
・種田山頭火の句
「どこでも死ねるからだで春風」「風の明暗をたどる」「秋風、行きたい方へ行けるところまで」「吹きぬける秋風の吹きぬけるままに」「春風の扉ひらけば南無阿弥陀佛」

【第四・第五段落…まとめ（第一～第三段落までの思考を通し明らかになってきたこと）】

・「風のこころ」の意味について、悟道のあり方、かたちに関し誤解をしかかっていた。
・誤解の内容…「浮き雲に待つこともなき身にしあらば風の心にまかすべきなり」について
↓虚無的で、生活を捨てた境遇が読ませた歌という響きを感じていた。
↓感覚的理解をしても、生臭い毎日を送る自我が反発するところがあった。
・誤解が意味すること↓自分が世俗黄塵のことに心までまみれてしまったことらしい（ということ）。

3　問1について

①　設問要求

> ①　課題文を読み、その内容を理解すること。
> ②　「風のこころ」とはどういうこころか、課題文中の文章を利用し、説明すること。
> ③　一〇〇字以内でまとめること。

②　答案作成へのアプローチ

問われているのは「風のこころ」についての説明である。説明に必要なポイントをつかむには幾つかの方法があるが、ここではもっとも一般的な作業手順を示しておく。

(1) **要求対象を分析＝要素分けする。**

「風のこころ」＝「風」＋「こころ」

(2) **要素ごとに、筆者が述べていることを押さえていく。**

(a) **「風のこころ」という語句が出てくる箇所→第四段落**

・筆者はそこで「風のこころ」について、悟道のあり方、かたちに関し虚無や境遇に傾くという誤解をしかかっていたと述べている。

(b) **「風」について→第一段落に着目**

・「風」の特性→本来物理現象だが、生き物でもある。どのような方向にも、どのような場所にも、形を見せずに吹いてくる。

・「清風（真理）」は、とくに求める必要はない。誰の窓にも平等に吹き込んでいるが、それをはばんでいるのは、我見（自我の認識）の強さ。

・自分と風が吹く対象（松）と風とが一つにとけあったところでは自我を空じることができる（という松原泰道師の説明を紹介）。

(c) **「こころ」という語句が出てくる箇所→第一段落の末文**

・「かたよらないこころ・こだわらないこころ・とらわれないこころ」（松原泰道師が、「真空不空」という禅の言葉に関し、「かたよらないこころ・こだわらないこころ・とらわれないこころ」という高田好胤師の言葉を援用し、物質的な現象か、あるいは実体のない空に偏ってしまう誤りを説いている、と述べている。）

(3) **(2)をもとに、必要ポイントを整理し、設問要求（「風のこころ」とはどういうこころか）に応える文を作成。**

使用できる字数がかなり少ないので、内容や表現の重複を避け、ポイントを絞り込むことが必要となる。但し、設問では、課題文中の文章を利用せよ（つまり、キーワード、キーセンテンスの言い換えは禁止）という条件が付いているので、自分なりの書き換えは極力避けなければならない。(2)で押さえたことを丁寧に整理し、読み手に分かるような文章にまとめていこう。

4 問2について

① 設問要求

① 課題文を読み、その内容を理解すること。
② ①を踏まえ、自分は将来医療人としてどうありたいと思うか、述べること。
③ 六〇〇字以内でまとめること。

② 答案作成へのアプローチ

(1) 課題文を読み、論述作成の手がかり・ヒントを得る。

課題文では直接医療のことには触れられていない。では、ここからどのようにして論述作成の手がかり・ヒントをつかんでいけばいいのだろうか。

(a) 出題側の狙いを読む。

入試小論文の基本的狙いは、大学で学ぶに相応しい力と資質を持った人間かどうかを試すことである。前者については文献読解力・論理的思考力・文章表現力・基本的知識などを備えているかどうかということが、後者については医療者に相応しい資質（人間性）を持った人物かどうかが試されることになる。一方、本問の課題文は、筆者の人生観・死生観・真理に関する見方等をベースにしたエッセイ（思いを自由に綴った文章）である。こうしたことから、本問で試されるのは、君の医療者としての資質（人間性）あるいは基本的価値観ということになる。設問要求を踏まえれば、まず問われるのは医療観であるが、医療とはいったいなんなのかを考えていくと、その底流をなす死生観、人生観、人間観そして真理追究の姿勢に至る。即ち、それらに関する君の考えや見方を探ることも、出題側の狙いのひとつであるといえそうだ。さらに、既述したようにエッセイを読むとは、筆者（他者）の思考に身を委ね、それを理解していく作業であり、ここから医療人に不可欠な資質である想像力や共感力も試されてくることが分かるはずだ。こうした点を頭において、筆者の観をつかみ、それを手がかりとして自分の観を展開していくという方向、あるいは筆者の思想からテーマ深化のヒントを得るつもりで、課題文を読んでいくとよい。

(b) **「いま、なぜ、このテーマか」（状況との関連を考える）**

小論文課題は「いま」と密接に関係する。ある課題が出題されるのは、それに関し、今、私たちの社会や世界で何らかの問題が起きていたり、解決すべき課題を抱えていたりするからである。またその問題とは、過去に根を持ち、将来に大きな影響をもたらしていく事象や現象である。こうした点を頭においての読解も有効だろう。本問に照らすならば、今医療の分野で起きている問題・問われている課題を想起し、その背景や原因、あるいはその意味や効果（影響）、それらに対する自分（医療人）としての対応などを考察するヒントをつかむことを目指し、課題文を読んでみよう。以下に幾つかの読み方のヒント（例）を示すので、適宜参考にするとよい。

▽第一段落から

風が持つ二つの側面→物理現象と生き物

←

医療のもつ二つの側面を想起（→論述材料の選択や分析に活用）

例）・科学研究の対象である疾病と、治療の対象となる「やまい」

・治療について→キュアとケア

・物理的治療法（臓器移植など）とインフォームド・コンセント　……など

風の特性→強弱さまざまに、どのような方向にも、どのような場所にも、形を見せずに吹いてくる

←

医療現場での問題や課題の特性を想起（→論点設定、材料選択、分析などに活用）

例）・患者の多様性（一人ひとり異なる人間であることから生じる特性）とそれへの対応の問題（データに頼った診断やマニュアル通りの医療のあり方から生じる不都合や問題）　……など

清風は誰の窓にも平等に吹き込んでいるのだが、それをはばんでいるのは、我見（自我からの認識）の強さ

物質的な現象か、あるいは実体のない空に偏ってしまう誤り

←

医療行為における医療者側の問題を想起（→論点設定や材料選択、分析に活用）

例）・パターナリズムの問題

・患部（部分）を診て、患者（人間）を看ないという医療のあり方の問題　……など

「かたよらないこころ・こだわらないこころ・とらわれないこころ」

←

望ましい医療のあり方、あるいは医療人としてのあり方を考える上でのヒントとして活用。

▽第二段落から

「色即是空　空即是色」（「般若心経」）＝「色（物質的現象）はすべて実体のない空であり、実体のない空であることが、物質的現象なのである」

←

近代科学（医学）の特性と限界を探る上でのヒントを得る。

例）・近代科学の手法である要素還元主義・分析的手法に着目し、それが進めてきたのは、実体のない空としての真理の追究ではないか、という論点（問題提起）を立て、医療分野の材料を用いて考察。

▽第三段落から

風を読み込んだ種田山頭火の句…「どこでも死ねるからだで春風」「風の明暗をたどる」「秋風、行きたい方へ行けるところまで」「吹きぬける秋風の吹きぬけるままに」「春風の扉ひらけば南無阿弥陀佛」

←

山頭火の句にはどれも死が織り込まれていることに着目し、それと比較しつつ、**現代社会の死生観の特徴**を押さえ、医療

現場での問題考察につなげていく。

ヒント）・現代の死は、多くが病院の中の死であり、日常生活で死の過程を見据えることがなくなった。

・一方で、生命科学や医療技術の急速な進展が、生や死の概念の見直しを突きつけているという現状がある。こうした事態にどう対応したらいいのか……。　……など

▽第四・第五段落から

「風のこころ」についての誤解（筆者の反省）

←

医療人としてのあり方を考えていく上での参考として活用　……など

(2) **(1)を踏まえ、自分は将来医療人としてどうありたいと思うか、自分の考えと根拠を整理し、論述の流れを工夫する。**

課題文型小論文作成の基本は、まず課題文の中心テーマとそれについての筆者の主張・論拠を捉え、それに対する自分の立場（賛成・反対・一部疑問等）を定め、独自の材料を用いて自分の主張と論拠を展開していくことである。但し、本課題においては、課題文のテーマと設問で求められているテーマとが一致しておらず、また論理的手順に基づき展開されている文章ではないため、こうした基本的な取り組み方は、そのままでは通用しない。ゆえに、ここでは、出題側の狙いを見据え、設問要求を踏まえての資料（課題文）の活用方法を工夫していく必要がある。その為のヒントを以下に示しておこう。

(a) **基本的な取り組み方をベースとした論述作成**

例）筆者が述べている「風のこころ」についての見解への賛否あるいは評価（自分の立場の明示）

←

その立場をとる基本的な理由の提示（ここで、現代医療の問題などを提示）

←

問題の背景・原因の分析……（ここで更に課題文を活用してもよい）

←

問題解決の方法とそれに向けて医療人としての自分がなすべきこと

←

「風のこころ」に関わらせての、医療人としての自分のあり方（まとめ）

(b) **その他**

小論文の構成要素ごとに、課題文をどこでどのように活用していくかを考え、それをもとにして、設問要求を満たす論述の流れを工夫する。その際大事なのは、課題文の核心をなす「風のこころ」についての筆者の考えは必ず押さえ、論述作成に活用していくこと。これを外すと、（たとえ**問1**が出来ていても）読解不十分という評価を受けてしまう恐れがあるので注意しよう。